

歴史の謎はインフラで解ける

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず 大石 久和



最近、かなり重いテーマが続いたので、今回は、われわれが職業としているインフラの整備管理が歴史とどう関わってきたのか、アラカルト的にテーマを選んで考えていきたい。

表題は土木学会会長時代に仲間の研究者たちとまとめた図書のタイトルであるが、ここに記載されたものばかりではなく、いくつかの話題を紹介したい。いまはコロナで会食どころではないが、コロナが収まり解禁になってくれば建設技術者同士の話題として使ってもらえたいという感じで書いてみたい。

①文明と土木

人と動物とを隔てるものは、文明の有無であると言える。文明とは「人間の知識や技術が向上し、社会制度などが整備されて、物質的・精神的に豊かになった状態」(明鏡国語辞典)を指す言葉だが、社会制度などが整備され、物質的・精神的に豊かになるきっかけとは何だったのだろうか。

文明とは英語ではcivilizationだが、そのもとはcivilという形容詞であり、これを工学であるengineeringにつけるとcivil engineeringつまり土木工学となる。農業とそのための定住が

文明を誕生させたが、生産の安定と向上のために世界の文明発祥地で行われたのが灌漑農業であり、そのための水路の整備と土地の区画整理であった。

一般にはこの紹介までなのだが、追加しなければならないengineeringは都市城壁の建設である。多くの人が集まらなければ文明は誕生もせず発達もしない。大勢が集まるためには身の安全が保障されていなければならない。

盆地や扇状地といった狭いところに住んできた日本では、見渡す限りの大平原に住まう恐怖感を理解できない。そこは多くの人種が混在し異なる価値観を持つ異民族が行き交っている大地であり、ここで住まうとはるか遠方から存在を発見されてしまうのである。

日本の歴史家はユーラシア人が必然とした都市城壁の重みを理解できていない。古くからの民族のなかで、日本人だけが都市全体を強固な城壁で囲まなかったし、囲む必要もなかったことにほとんど触れようもしないのである。

いまから5500年前のメソポタミアのシュメール人は、すでに城壁で都市全体を囲んでいたのだ。こうしなければ、人びとが蝸集するこ

ともできなかったからなのである。シュメール人は灌漑農業を行っていたが、収穫物を遊牧民や山岳民に何度も篡奪された経験をしてきたに違いない。

その結果、費用も労力も膨大なものが必要であるにもかかわらず、都市民のための城壁を建設したのだ。これは今日では建築の範疇と言えるが、まさにcivil engineeringである。(中国の春秋時代に「土木」という成語が登場するが、土木+建築の概念であった。)

シュメール文明は都市国家文明であった。ここで王制が生まれ、宗教が生まれ、少し後に文字が発明されたのだ。まさに都市は文明のゆりかごなのである。

それを可能としたのが、土木だったのだ。

②明治維新と北前船

全国規模で生産地と消費地を結ぶ全国物流が確立したのは、江戸時代のかかなり早い時期であった。

1672年に幕府から出羽国の幕府米を江戸へ輸送するように命じられた河村瑞賢は、津軽海峡や房総半島を大回りするような難所を避けるとともに、波の荒い太平洋を長距離航海するという危険を避けるために、日本海側を航行することとした。

酒田から能登、温泉津、下関を経て瀬戸内海から大坂に至り、紀伊半島を回って伊豆の下田に達する西廻り航路を開発した。それまでの航路は陸上輸送と舟運を繰り返さなければならなかったために非効率で費用もかかるものだった。

この航海に投入されたのが北前船で、これは荷物を預かって運送するのではなく、買積み廻

船という船主が寄航港で商品を売買するという画期的な廻船であった。これはもう今日の商社というべきもので、商品の生産地と消費地との関係が飛躍的に高まり、蝦夷と大坂を始めとする本州各地との関係を拡大させたのだった。

このためには、各地の港湾整備、河川を利用するための浚渫などの河川低水工事などの土木が多用されたのは当然である。

北前船が日本の経済を刺激して各地に繁栄地を誕生させたが、この寄港地であった酒田や敦賀などに大商人が大資産を蓄えることとなった。これが、明治に入って彼らが地元銀行を開いたり鉄道事業を興したりする原資となったのだ。

したがって、北前船は明治の発展、つまり日本の近代化にも大きく貢献したのである。さらに、この船が長州や薩摩にも莫大な富をもたらしたのだった。

長州では、下関に藩営の倉庫兼貸金業の「越荷方」を設け、下関から大坂の相場を見ながら換金高の高いときに荷物を運んで大儲けし、さらに資金の貸し付けなどでも莫大な利益を得たのだ。

薩摩は昆布の中国輸出で稼いでいた。帰り荷に漢方薬やその種を入手して大きな利益を上げたのだった。沖縄が長く昆布の一人あたり消費量が日本一だったのは、沖縄料理に昆布がマッチしたからだが、すべて蝦夷地からのものであり、薩・中貿易の付録だった。

日本史ではほとんど説明されないが、戊辰戦争から明治維新への流れは北前船による薩長での富の集積が可能としたのだ。土木インフラが明治を切り開いたのである。